

結合形態素による日本語の品詞分類

一名詞と動詞は言語の普遍性か？－

山橋 幸子

1. はじめに

伝統的な主要品詞とされる名詞と動詞の区分は一般に言語の普遍性と言われているが、その根拠は語の文中における機能つまり統語上の機能の区別にある。このことは、「名詞や動詞などの品詞区分はどの言語にも認められる統語上の区分であり、これらが各言語の構造の基本をなす」と言う、変形生成文法の提唱者 Noam Chomsky (1965: 28) の言にも明確に表されている。

日本語においても、品詞分類は通常、語の意味、形態、統語上の特性というように複数の尺度が併用されてはいるものの、根底のところで統語論と密接に結び付けられて名詞と動詞が区別されている。^{*1}

しかし、本稿は語の分類基準を統語論上の機能に関連させるのではなく、今までに試みられたことのない Susan Steele (1988) の「語彙分類の決め手となるものは、実質的な意味を有さない“closed-class elements”の形態素である」という原理を日本語に適用する。日本語の分類基準は、文法格助辞及び時制／アスペクト助辞という二種類の結合形態素 (bound morphemes) であるという観点から、語の中心となる核がこれらの結合形態素とどのような結合関係を有するかということを基準に分類する。結果は先行研究と大きく異なり、言語の普遍性といわれる名詞と動詞の区分すらないものとなる。以下、統語論上の機能に基づく品詞分類の問題点を最初に述べてから、提案の分類に入る。

2. 統語的基準による品詞分類の問題点

名詞と動詞は、プラトン（Plato BC429—347）以来主語と述語の区別に密接に結びつけられ、印欧語のみならずどんな言語にも存在すると言われている。確かに英語などの場合には、語の形態変化によって示される統語上の機能と品詞の間には単純な一対一の関連性が見られる。動詞は単独で述語になれるが、名詞は単独では述語になれず、“be”, “become”等の代役動詞を伴う。反面、名詞はそのまま主語になれるが、動詞は“-ing”という接尾辞を伴ってはじめて主語になる。従って、主語と述語の区別に密着に結び付けられる名詞と動詞の区分は、英語文法の説明上重要な意味を持つ。しかし、日本語の場合も同じことが言えるのであろうか。

森岡の「分類は語が文の構成要素としてどのような役割を果たすかを明らかにするために行う」（森岡健二1994：106）という言葉にも示されているように、一般に品詞分類は統語的機能が重要視されており、とりわけ名詞と動詞は、基本的に英語などの西欧語と同様に扱われている。つまり、動詞は単独で述語になれるが、名詞が述語になるためには断定あるいは指定の助動詞と呼ばれる「だ」あるいはその丁寧体である「です」を伴わなければならないとされる。反面、名詞はそのまま主語になり、動詞が主語になるには「-の」という接尾辞を伴い名詞化されなければならないと言われている。この名詞と動詞の区分に対する考えは、これまで日本語の研究に携わった学者のほとんどが合意しているといっても過言ではない。^{*2}しかし、本稿はこの立場に疑問を抱く。なぜなら、名詞と動詞を区別した上記の基本的な基準がそのメンバーの全てに当てはまらないからである。

第一に、名詞と認められているものが全て主語になれるとは限らない。『学研 現代新国語辞典』や『集英社 国語辞典』などの辞書にも見られるように「無二」は名詞であるが、「無二の親友」など「の」を伴い修飾語となる事はあるが、「*無二がいい」などと

言う事はなく主語にならない。（*は非文を意味する。）同様に「既婚」も名詞とされるが、「既婚の方が。。。」「既婚者。。。」「既婚が。。。」「既婚が。。。」などとは言わない。他にも「遺憾」「正気」「抜群」など特に漢語にはこのような例が少ない。

また、名詞が述語になる場合、助動詞「だ」を伴い、名詞はそのままでは述語になれないと言われる。しかし、「山田さんは社長」の例にあるように「社長」という名詞が単独で述語の機能を果しており、「だ」を伴わない場合もある。変形生成文法などでは深層構造に於いて「山田さんは社長だ」のように「だ」があり、それが表層において削除されたと考える。しかし、それを示す直接の証拠はなく、又、「だ」の存在がむしろ非文を招くケースも少なからずある。例えば、「山田さんは、社長か」とは言いが「*山田さんは、社長だか」とは言わない。通常「だ」は断定の助動詞と言われるが、これが疑問を表わす「か」と同時に起こることは、意味上矛盾が生ずるからである。だとすれば、「山田さんは、社長か」の深層において述語の部分に「だ」があるとする考えの正当性は極めて低い。従って、「社長」という名詞はここでも助動詞を伴うことなく述語として機能する事になる。同様のことが、「加藤さんは、学生かしら」の「学生」にも言える。「*加藤さんは、学生だかしら」は非文である。また、名詞が単独に述語となる例は、上記のような主文内の場合のみならず、「健が子どもの時、（母が死んだ）」のように埋め込み文内においても見られる。「健が子ども」は、「時」を修飾する埋め込み文であるが、主語は「健」であり、述語は「子ども」である。「子ども」に後続する「の」は、名詞と名詞を接続する助詞であり、助動詞「だ」ではない。

動詞に関しても一般に言われているほど構文上の機能と単純な関連性を持っている訳ではない。例えば、動詞は主語になる場合、通常「一の」を伴うが、しかし、述語になる時の形態のまま主語になる場合がある。例えば、「（行きたければ、）行くがいい」の「行く」は動詞であるにもかかわらず、「一の」を伴うことなく主語となっ

ている。他にも「逃げるが勝ちだ」の「逃げる」や「学校から帰るが早い、（遊びに出かけた）」の「帰る」のように「一の」を伴うことなく主語になっている例がある。そんなに多くはないにせよ、上記のように規則的に見られる現象なので無視できない。

又、動詞の述語としての機能に関しては、確かに述語になれる動詞はないのかもしれない。しかし、中には述語になれるのは埋め込み文内においてのみで、主節では述語になれる動詞もある。例えば、「[その言葉の意味を知る] ことが大切だ」に見られる「知る」という動詞である。ここでは、「知る」は、「その言葉の意味を知る」という「こと」を修飾する埋め込み文の述語である。しかし、「*彼はその言葉を知る」が非文である事から分かるように主節において「知る」はそのまま述語になる事が出来ない。主節で述語になるには「彼はその言葉を知っている」に見られるように、「知る」は「知っている」というように形態変化する必要がある。

従って日本語に於いては、統語論上の機能に結び付けられた名詞と動詞という区別があまり意味をなさないことになる。以下、日本語の品詞分類をおこなうが、まず本稿の提案のきっかけを簡単に述べる。

3. バックグラウンド

S. Steele (1988) は、それぞれの言語はそれぞれ独自の文法体系を持つという立場に立ち、語の核である語基 (base) の持つ独立接尾辞 (absolutive suffix) と所有接頭辞 (possessive prefix) との結合性を基にルイセーニヨ語 (Luiseno)^{*3} の語彙の分類を行った。その結果、名詞や動詞という品詞とは全く関連性のない、ルイセーニヨ語特有の分類に至った。この研究を基にSteeleは言語の普遍性を否定はしないものの、それは一般に考えられているよりずっと抽象的であり、各言語の語の分類はその言語の持つ“closed- class elements (閉じられた要素)”を基準にすべきであることを提唱する。本稿における日本語の語の分類はこの原理に基づいている。

4. 語の分類

語の分類に際して本稿が持つ基本的な考えは——文は語によって構成され、語は形態素 (morphemes) によって構成され、文の構成は最も「小さな単位」から次第に「大きな単位」へと積み上げられて作られる——という Ajdukiewicz (1967) の原理であり、「語」の定義に関しては、文の成分としての単位、つまり西欧語において使われている “word” の立場をとる。従って、本稿の「語」は松下大三郎の主張する「詞」、森岡健二の「語」、橋本進吉の「文節」と一致し、学校文法など通常 (付属) 語として扱われている助詞や助動詞は、ここでは語の構成要素である。以下、「語」の構成要素を先ず明確にしてから、分類の基準である時制／アスペクトと文法格助辞の分布上の特徴を示し、意味を有する「語」の核のこれら二つの助辞との結合能力を考察する。

4. 1. 語の構成要素

下記の文は、「社長が」、「りんごを」、「食べる」という三つの構成要素、つまり「語」から成り立っている。

(1) 社長が りんごを 食べる

これらの語は「社長」、「りんご」、「食べ」という実質概念的な意味を有する形態素と、「が」、「を」、「る」という文法的、形式的意味を有する形態素に分類できる。意味を有する形態素「社長」、「りんご」、「食べ」は、語の中心となる核であり、これを「語基」と呼ぶことにする。一方、「が」、「を」、「る」は、その扱い方が立場により異なり、学校文法などでは「が」、「を」は助詞として語の一種として取り扱い、語の一部分とされる「る」とは区別している。しかし、ここでは、「が」、「を」、「る」は、いずれも文中で決して独立して使われることのない、結合形態素である事を

根拠に、「助辞」と呼ぶことにする。

語の構成要素には、上記の語基、助辞以外にもう一つ別な種類の形態素がある。例えば、

(2) 社長ーが りんごーを おー食べるになーる

という例文の「おー食べるになーる」は、「お．．．にな」という尊敬を表わす結合形態素を含む。これは、語基「食べ」を包むようにして起こっている結合形態素であり、上記の「助辞」とは異なる種類の語の構成要素である。これを「接辞」と呼ぶことにする。

従って、語は語基、助辞、接辞という三種類の異なる形態素によって構成される。以下、これらについて定義する。

4. 1. 1. 「助辞」

前述のように本稿では、(1)に見た「が」、「を」、「る」は語の構成要素であり、「助辞」である。助辞は、常に他の形態素に付属して文中に現れるが、語基とは異なり比較的容易に列挙でき、又、今後新たに日本語に追加される事は考え難く、いわゆるSteeleの言うclosed-class elementsと考えられる。助辞は、機能上いくつかのグループに分類することができる。例えば、時制／アスペクトを表わす形態素には、「る」の他に次のようなものがある。

(3) 助辞

時制／アスペクト——「る」／「ーu」*⁴「い」(非過去／非完了)、
「た」／「だ」「かった」——(過去／完了)

(3)の「い」、「かった」はいわゆる形容詞に結合する助辞であり、形態上動詞に付く「る」／「ーu」、「た」／「だ」と異なる。しかし、これらの機能もまた時制／アスペクトを表わすことであるという意味では「る」／「ーu」、「た」／「だ」と同じでありこの

グループに含まれる。従って(3)に挙げた形態素は全てお互いに類似の機能を持っており、同時に起こることは決してない。「る」を含む語は、「た」、「い」等と共起することがないのである。同様にして他の助辞を分類すると次のようになる。

- (4) 文法格助辞——「が」(主格)、「を」(対象格)
意味格助辞——「から」(起点)、「まで」(範囲)「に」(対象／到達)、「へ」(方向)、「で」(限定)、「より」(比較) 他
並立助辞——「や」「と」「か」「とか」「に」 他
副助辞——「だけ」(制限)、「ばかり」「ぐらい」／「くらい」(概算)、「こそ」(強調)、「ほど」(程度) 他
係り助辞——「は」(主題)、「さえ」(譲歩)、「しか」(制限)、「も」(拡大)、他
修飾助辞——「の」(属性)、「な」(形容)
接続助辞——「けれど」「が」「のに」(逆接)、「から」「ので」(原因・理由)、「と」「ば」(仮定)、「て」「し」(並挙／接続)、「なら」(条件) 他
終助辞——「よ」「さ」(主張)、「ね」(共感) 他
陳述助辞 1 ——「ろ」／「e」(命令)、「よう」／「oo」(提言)
陳述助辞 2 ——「な」(禁止)、「わ」(主張)、「か」(疑問) 他
体言化助辞——「の」、「から」
断定助辞——「だ」「だった」「です」「でした」

上記の用語は、修飾助辞、体言化助辞、陳述助辞等のように、本稿の目的のために便宜上用いたものもあるが、大半は一般に使われている用語を基にした。又、一般に文法格助辞と意味格助辞は「格助詞」として同じグループに分類されているが、「東京からが」などのように文法格助辞と意味格助辞が共起するという分布上の理由を根拠

に区別した。同様の理由で、「こそ」を「は」や「さえ」とは違うグループに、また陳述助辞も 1 と 2 に分けた。一般に形容動詞の語尾とされる「な」は「の」と同様に、いわゆる名詞句の修飾語を構成することを根拠に、修飾助辞とした。「の」と「から」を体言化助辞としたのは、「歩くのが遅い」、「食べてからが大変だ」のようにこれらが付く語基をいわゆる体言に変えることに基づいた。上に列挙した形態素が助辞の全てとは言えないが、著しく追加されることはないと思う。従って、助辞を「時制／アスペクト、文法格助辞、意味格助辞、並立助辞、副助辞、係り助辞、修飾助辞、接続助辞、終助辞、陳述助辞 1、陳述助辞 2、体言化助辞、断定助辞を含む結合形態素」と定義する。

4. 1. 2. 「語基」

このセクションでは語基の定義について検討する。語基は、助辞と異なり単独で文中に起こることもあり、その例は非常に多く、しかも基本的に必要に応じていくらでも無制限に追加が可能な“open-class elements (開かれた 要素)”である。前述したように、語基は意味を担い語の核になる形態素であるが、より具体的な定義をここで行う。下記の文(5)を構成する語を語基と助辞に分け、語基を X で表わすと(6)のようになる。

(5) 健は 今日 勉強を してから テレビを 見た

(6) 健ーは …………… Xー係り助辞

今日 …………… X

勉強ーを …………… Xー文法格助辞

しーてーから…………… Xー接続助辞ー体言化助辞

テレビーを …………… Xー文法格助辞

見ーた …………… Xー時制

上に示されたように、X は助辞を一つ含むこともあり、二つ含むこ

ともあり、全く含まないこともある。しかし、(5)では助辞を含まない語基「今日」も、例えば「今日—は・・・」のように、助辞と結合することもあるので、語基とは、助辞と結合可能な意味を担う形態素のことであると仮に考える事ができる。しかし、これだと「し」も「し—て」も語基という事になる。「し」は助辞の「て」と結合するし、「し—て」は助辞の「から」と結合するからである。従って、語基を「それ自身助辞を含まず、助辞と結合可能な意味を担う形態素のことである」と定義する。語はこの語基を土台として形成される。

4. 1. 3. 「接辞」

既述のように語の構成要素には助辞とは異なる結合形態素、接辞がある。例えば、

(7) 先生—が 子ども—をお—褒め—にな—る

という例文の「お—褒め—にな—る」は、語基「褒め」に時制の「る」のほかに「お……にな」という尊敬を表わす結合形態素が結合しているが、この形態素が接辞である。接辞を含む「お—褒め—にな」は、助辞の「る」と結合するので語基ということになるが、下の分析が示すように、単純な語基ではなく「複合語基」である。

(8)	[[お—	[褒め]	—	にな]	—	る]
				語基			語基				
				—— 接辞 ——						助辞	

従って接辞とは、語基の内部に現れ複合語基を構成する結合形態素のことである。「お—にな」は、下に示すように敬語辞に所属する尊敬を表わす接辞である。

(9) 接辞

敬語辞 接頭辞——「お」「ご」「御」他(尊敬／丁寧)

接尾辞——「さん」「さま」「殿」他(尊敬／丁寧)、「ども」(謙遜)「め」(無作法)、「られ」(尊敬)「ます」(丁寧)

接辞——「お……にな」(尊敬)、「お……す」(謙遜)

接辞は語基の内部に起こるという意味で助辞とは区別されるが、助辞同様closed-class elementsである。従って、そのメンバーを列挙するのはそう難しくなく、上記の他に次のようなものがある。

(10) 接尾辞 複数辞——「たち」、「ら」

類別辞——「冊」「人」「枚」「本」「匹」「台」「個」「匹」「件」「円」他

受け身辞——「られ」／[－are]、可能辞——「られ」／[－are]

自発辞——「られ」／[－are]、使役辞——「させ」／[－are]

使役辞——「させ」／[－are]、伝聞辞——「そう」

状態辞——「が(る)」(情意)、「ま(る)」(情態)他

様態／推量辞——「そう」(様態)、「よう」(推量)他

体言化辞——(寒)「さ」、(甘)「み」、(悲し)「げ」他

叙法辞——「た(い)」(希望)、「な(い)」(まい)「(打消し)」、「がち」(情態)他

接頭辞 程度辞——「うら」(悲しい)、「か」(弱い)、「大」(足)、「小」(銭)「ま

る」(一日)「生」(まじめ)
他

ここで用いた名称は本稿の目的で暫定的に使用したものである。上に列挙したものが接辞の全てであるとは思わないが、しかし著しく追加されることはない。従って、接辞を「語基の内部に現れ複合語基を形成する敬語辞、複数辞、類別辞、受け身辞、可能辞、自発辞、使役辞、伝聞辞、状態辞、様態／推量辞、体言化辞、叙法辞、程度辞を含む結合形態素である」と定義する。

4. 2. 「語基」の形式上の特徴と分類

語基といってもその中には「すこし、とても、もっと」など程度を表すもの、「ああ、もしもし、はい」など感動、呼びかけ、応答を表わすもの、「だから、しかし、そして」など前後の関係をはっきりさせるため用いられるものなど実質概念性が希薄でむしろ関係性の意味が濃いものがあるが、これらは今後の課題とし、ここでは、「学生」「赤」「見(る)」「寒(い)」「静か」など実質概念的な意味を有するもののみ扱う。

意味を有する形態素である語基は、意味上いくつかのグループに分ける事ができるが、それは助辞との結合能力によって示される。ここで扱う実質概念的な意味を有する語基分類の決め手は、助辞の中でも文法格助辞と時制／アスペクト助辞である。以下、この提案の根拠となったこれら助辞の分布上の特徴を述べる。

まず最初に(3)、(4)に述べた13種類の助辞は、分布上三つのタイプに分けることができる。常に語基に直接結合するもの、語基との間に常に他の助辞があり、語基に直接結合することがないもの、そして語基に直接結合することも、しないこともあるものである。常に語基に直接結合するものには、下記の例が示すように時制／アスペクト、陳述助辞1がある。

- (11) 時制／アスペクト：寝ーる／た(ーよ)、重ーい／かった

(一ね)

陳述助辞 1 : 寝—ろ／よう (一よ)

これに対し、接続助辞、体言化助辞「から」、陳述助辞 2 は、以下に示すように常に時制／アスペクトに後続し語基に直結することは決してない。(＃はそれ以上何も付かない語の境界を意味する)

(12) 接続助辞：寝—る—けれど／が／のに／ので／と／し／なら／から＃
重—い—けれど／が／のに／ので／と／し／なら／から＃

体言化助辞「から」： 食べ—て—から—が

陳述助辞 2 : 寝—る—な／わ／か (一よ)

第三のタイプは、語基に直結することも又、しないこともあるもので、文法格助辞、意味格助辞、並立助辞、副助辞、係り助辞、修飾助辞、終助辞、体言化助辞「の」、断定助辞がこのタイプである。(13)は、これらの助辞が語基に直結する事を示す。

(13) 文法格助辞：本—が／を＃
意味格助辞：東京—に／から／より／まで／へ／で (一は) ＃
並立助辞：本—と／や＃ 鉛筆
副助辞：肉—だけ／ばかり／こそ／ほど／ぐらい (一は) ＃
係り助辞：本—は／さえ／しか／も＃
修飾助辞：本—の＃、静か—な (一だけ)
終助辞：健—ね／さ／よ＃
体言化助辞「の」：赤—の (一だ)
断定助辞：健—だ／だった (一よ) ＃

(14)は、上記の助辞が語基に直結しない場合の例である。

- (14) 文法格助辞：見—る—が（早いか）、東京—から—が、肉—だけ—を
- 意味格助辞：日本—だけ—で／から／に、3時—ぐらい—よ
り／まで
- 並立助辞：健—から—と／や 直美—から—と／や
- 副助辞：食—べ—る—だけ、彼—の—こそ／ほど／ぐらい
- 係り助辞：見—た—は（いいが）、アフリカー—で—さえ／も
／しか
- 修飾助辞：東京—から—の、子供—だけ—な（—の—だ）
- 終助辞：健—だけ—ね／よ／さ
- 体言化助辞「の」：見—る—だけ—の
- 断定助辞：肉—ばかり—だ

これら三つのタイプの助辞（即ち、常に語基に直結するもの、決して直結しないもの、直結する事もあるもの）は、さらに下位分類される。決して語基に直結しない助辞（つまり、接続助辞、体言化助辞「から」、陳述助辞2）は、さらに、その後に他の助辞が決して付かないものと、付くこともあるものとに分けることができる。（12）に見られるように接続助辞は他の助辞に決して後続されず、体言化助辞「から」と陳述助辞2は後続されうる。同様のことが語基に直結することもある助辞（つまり、文法格助辞、意味格助辞、並立助辞、副助辞、係り助辞、修飾助辞、終助辞、体言化助辞「の」、断定助辞）にもいえる。（13）に見られるように、他の助辞が後続することがないのは、文法格助辞、係り助辞、修飾助辞「の」、並立助辞、終助辞であり、他の助辞が後続することのあるものは意味格助辞、副助辞、体言化助辞「の」、断定助辞である。最後に、（11）に見られるように語基に直結する助辞（つまり、時制／アスペクト、陳述助辞1）は全て、他の助辞が後続しうる。（15）は上記の助辞の語基との関係における分布をまとめたものである。

- (15) A. 常に語基に直結する助辞
- a. 他の助辞に後続されない——なし
 - b. 他の助辞に後続されうる——時制／アスペクト、
陳述助辞 1
- B. 決して語基に直結しない助辞
- a. 他の助辞に後続されない——接続助辞
 - b. 他の助辞に後続されうる——体言化助辞「から」、
陳述助辞 2
- C. 語基に直結することもある助辞
- a. 他の助辞に後続されない——文法格助辞、係り助
辞、修飾助辞「の」、並立助辞、終助辞
 - b. 他の助辞に後続されうる——意味格助辞、副助辞、
体言化助辞「の」、断定助辞

上記に示されたように、時制／アスペクトと陳述助辞 1 は語基に直結するという意味で他の助辞と区別され、なかでも時制／アスペクトは以下に見られるように、常に起こるとは限らない陳述助辞 1 とは異なる。

- (16) (時制／アスペクト) 寝ーる／た；(陳述助辞 1) 寝ーろ
／よう
(時制／アスペクト) 違ーう／った；(陳述助辞 1) * 違
ーえ／よう
(時制／アスペクト) 似ーる／た；(陳述助辞 1) * 似ー
れ／よう
(時制／アスペクト) 高ーい／かった；(陳述助辞 1) *
高かーろ／こう
(時制／アスペクト) 楽しーい／かった；(陳述助辞 1)
* 楽しーろ／よう

従って、時制／アスペクトを分類の基準にする事を提案する。これを基に語基は形式上まず二つに大別される。

(17) a. 時制／アスペクトと結合する語基

食べ（る）、歌（う）、見（る）、違（う）、似（る）、
な（い）、安（い）、暑（い）、近（い）、赤（い）、
痛（い）、悲し（い）、丸（い）、古（い）、

b. 時制／アスペクトと結合しない語基

東京、本、山、結婚、紫、三角形、既婚、中庸、意見、春、
遺憾、抜群、好き、嫌い、温厚、静か、有名、意地悪、
親切

(17) a は時制／アスペクトと結合する語基の例であり(17) b は結合しない語基の例であるが、時制／アスペクトのみを基準にしたグループのメンバーを意味上統一するのは困難である。従って、この分類を更に下位分類するための基準が必要である。そこで、(17) b の語基を考察すると、これらは時制／アスペクトとは結合しないが、(13)(14)に挙げられた助辞（つまり、語基に直結する事もありうる文法格助辞、意味格助辞、並立助辞、副助辞、係り助辞、修飾助辞、終助辞、体言化助辞「の」、断定助辞）のうちのいずれかと結合する事が分かる。以下にその例を挙げる。

(18) a. 語基—文法格助辞

東京、本、山、結婚、紫、三角形—が／を
既婚、抜群、中庸、好き、嫌い、静か、有名—*が／
*を

b. 語基—意味格助辞

東京、本、山、結婚、紫、三角形—に／から／より／

まで／で

既婚、中庸—より／＊に／＊から／＊まで／＊で

抜群、好き、嫌い、静か、有名—に／＊から／＊より
／＊まで／＊で

c. 語基—並立助辞

東京、本、山、結婚、紫、三角形—と／や

既婚、中庸—と／や

抜群、好き、嫌い、静か、有名—＊と／＊や

d. 語基—副助辞

東京、本、山、結婚、紫、三角形—だけ／ばかり／こ
そ／ほど／ぐらい

既婚、中庸、好き—こそ／＊だけ／＊ばかり／＊など
／＊ほど／＊ぐらい

抜群、嫌い、静か、有名—＊だけ／＊ばかり／＊など
／＊こそ／＊ほど／＊ぐらい

e. 語基—係り助辞

東京、本、山、結婚、紫、三角形—は／さえ／しか／
も

既婚、中庸—も／は／＊さえ／＊しか

抜群、好き、嫌い、静か、有名—＊は／＊さえ／＊し
か／＊も

f. 語基—修飾助辞

東京、本、山、結婚、紫、三角形—の／な

既婚、抜群、中庸—の／＊な

好き、嫌い、静か、有名—＊の／な

g. 語基—終助辞

東京、本、山、結婚、紫、三角形—ね／さ／よ

既婚、抜群、中庸、好き、嫌い、静か、有名—ね／さ
／よ

h. 語基—体言化助辞「の」

東京、本、山、結婚、、紫、三角形—の

既婚—の

拔群、中庸、好き、嫌い、静か、有名—*の

i. 語基—断定助辞

東京、本、山、結婚、紫、三角形—だ

既婚、拔群、中庸、好き、嫌い、静か、有名—だ

以上をまとめたものが次の表である。(△は各助辞のうちの一部とだけ結合可能なことを表す)

語基 \ 助辞	文法格	意味格	並立助	副助	係り助	修飾—「の／な」	終助辞	体言化助	断定
①東京	○	○	○	○	○	○／○	○	○	○
②本	○	○	○	○	○	○／○	○	○	○
③山	○	○	○	○	○	○／○	○	○	○
④結婚	○	○	○	○	○	○／○	○	○	○
⑤紫	○	○	○	○	○	○／○	○	○	○
⑥三角形	○	○	○	○	○	○／○	○	○	○
⑦既婚	×	△	○	△	△	○／×	○	○	○
⑧中庸	×	△	○	△	△	○／×	○	×	○
⑨拔群	×	△	×	×	×	○／×	○	×	○
⑩好き	×	△	×	△	×	×	○	×	○
⑪嫌い	×	△	×	×	×	×	○	×	○
⑫静か	×	△	×	×	×	×	○	×	○
⑬有名	×	△	×	×	×	×	○	×	○

上記の表から、①－⑥に挙げた語基は全ての助辞と結合可能であるという点に関し、他の語基と異なっている事が分かる。そしてこれは、文法格助辞との結合性によってはっきりと示されている。①－⑥の語基だけが文法格助辞と結合可能である。これを根拠に、文法格助辞を助辞／アスペクトに次ぐ分類基準とする。従って、語基は理論上以下に示すような4つのグループに分類されることになる。(＋は結合可能、－は結合不可能を示す。)

- (19) a. 時制／アスペクトと文法格助辞の両方に結合可能なもの
 (+時制／アスペクト；+文法格助辞)
- b. 時制／アスペクトと結合可能だが文法格助辞とは結合不可能なもの
 (+時制／アスペクト；－文法格助辞)
- c. 文法格助辞と結合可能だが時制／アスペクトとは結合不可能なもの
 (－時制／アスペクト；+文法格助辞)
- d. 時制／アスペクトとも文法格助辞とも結合不可能なもの
 (－時制／アスペクト；－文法格助辞)

実際、以下に示すように、それぞれのグループに属する語基が存在する。

- (20) a. (+時制／アスペクト；+文法格助辞) の特徴を持つ語基
 赤 (－い／－が)、青 (－い／－が)、黒 (－い／－が)、
 黄色 (－い／－が)、白 (－い／－が)
 丸 (－い／－が)、四角 (－い／－が)
 慰め (－る／－が)、甘え (－る／－が)、恐れ (－る／－が)、諦め (－る／－が)
- b. (+時制／アスペクト；－文法格助辞) の特徴を持つ語基
 食べ (－る／－*が)、見 (－る／－*が)、歌 (－う／－*が)
 似 (－る／－*が)
 痛 (－い／－*が)、かゆ (－い／－*が)、寂し (－

い／－＊が）、悔し（－い／－＊が）、悲し（－い／－＊が）、恥ずかし（－い／－＊が）
かしこ（－い／－＊が）、ずる（－い／－＊が）、優し（－い／－＊が）
広（－い／－＊が）、古（－い／－＊が）、甘（－い／－＊が）

c. （一時制／アスペクト：＋文法格助辞）の特徴を持つ
語基

ピンク（－＊る／－が）、ベージュ（－＊る／－が）、
緑（－＊る／－が）
紫（－＊る／が）、灰色（－＊る／－が）
三角形（－＊る／－が）、台形（－＊る／－が）、楕円形（－＊る／－が）
東京（－＊る／－が）、健（－＊る／－が）、本（－＊る／－が）、
山（－＊る／－が）、意見（－＊る／－が）、結婚（－＊る／－が）

d. （一時制／アスペクト：－文法格助辞）の特徴を持つ
語基

好き（－＊る／－＊が）、嫌い（－＊る／－＊が）、残念（－＊る／－＊が）、
既婚（－＊る／－＊が）、真面目（－＊る／－＊が）、
愚か（－＊る／－＊が）、
意地悪（－＊る／－＊が）、親切（－＊い／－＊が）、
寛大（－＊い／－＊が）

4. 2. のはじめに、意味上のグループは形式上の分類と密接な関係があるということを述べた。同じグループに属する語基同志を意

味上要約することは我々の想像の範囲を出るものではない。しかし、上記の例から、（＋時制／アスペクト：＋文法格助辞）という語基の形式上の特徴は、通常考えられているより詳細に分けられた意味上のグループと密接な関係にある事が分かる。

例えば、動作、作用を表すものは通常いわゆる動詞という一つの品詞にまとめられるが、上記の分類では「甘え（る）、慰め（る）、恐れ（る）、諦め（る）」など人間の心の動きを表すものは（＋時制／アスペクト：＋文法格助辞）の形式的特徴を持ち、「食べ（る）、見（る）、歌（う）、似（る）」など他の動作、作用を表すものは（＋時制／アスペクト：－文法格助辞）の特徴を有する。状態を表すものはことさら詳細に分類される。例えば、色に関しては、（＋時制／アスペクト：＋文法格助辞）の形式的特徴を持つものは「赤、青、黄色、黒、白」というように原色／基本色に限られ、「緑、紫、灰色、ピンク、ベージュ」など原色／基本色以外の色は（－時制／アスペクト：＋文法格助辞）の特徴を持つ。形状に関しても同様に、「丸、四角」など基本形を表すものは（＋時制／アスペクト：＋文法格助辞）の形式的特徴を有し、「三角形、台形、楕円形」など基本形以外の形状を表すものは（－時制／アスペクト：＋文法格助辞）の特徴を持つ。又、人間の感覚、感情に関しては、西尾寅弥（1972）のように「私」という一人称に関係するものとそうでないものに分けられる。感覚を表す「痛（い）、かゆ（い）、寒（い）」などは、例えば「私は痛い」とは言うが「*彼は痛い」とは言わないことから分かるように一人称に限られている。同様に感情を表す「寂しい、悔しい、悲しい、恥ずかしい」なども「私は悔しい」とは言うが「*彼は悔しい」とは言わない事から分かるように一人称に限られている。一人称に限られる感覚、感情を表すこれらの語基は（＋時制／アスペクト：－文法格助辞）の特徴を持つ。しかし、「好き、嫌い、残念、深刻」など一人称に限られていない場合の語基は（－時制／アスペクト：－文法格助辞）という特徴を持つ。又、動物の性質、状態に関するもののうち、「意地悪、真面目、温厚、寛大、几帳面、

親切、おろか、既婚、熱心」など人間だけの性質、情態に限るものは（－時制／アスペクト：－文法格助辞）の特徴を持ち、「賢い、とろい、優しい、ずるい、おとなしい、愛くるしい」など人間以外の他の動物とも共有する性質、情態をあらわすものは、（＋時制／アスペクト：－文法格助辞）の特徴を有する。「広い、古い、長い、安い」など動物以外の事物、事柄の属性を表すものは（＋時制／アスペクト：－文法格助辞）の特徴を有し、「甘い、塩っぱい、酸っぱい」など味を表すものもこの特徴を持つ。最後に、「健、本、山、東京、意見、運動会」のように人、物、事柄の実態概念を表すものは（－時制／アスペクト：＋文法格助辞）の特徴を有し、従って「結婚」はこの中に含まれる。しかし、「未婚、既婚」など人間の状態を表すものは（－時制／アスペクト：－文法格助辞）の特徴を有し「結婚」とは区別される。以上の事をまとめると、形式上の分類と意味上の分類との関係は次のようになる。

(21)

形式上の分類	意味上の分類
①（＋時制／アスペクト： ＋文法格助辞）	原色／基本色、基本形、人間の心の動きなど
②（＋時制／アスペクト： －文法格助辞）	人間の心の動き以外の動作・作用、一人称の感覚・感情、人間に限定されない動物の性質・情態、味を含む物・事柄の属性
③（－時制／アスペクト： ＋文法格助辞）	基本色以外の色、基本型以外の形状、人・物・事柄の実態概念
④（－時制／アスペクト： －文法格助辞）	一人称に限定されない感情、人間だけの性質・情態

上記の意味上の要約は最善のものではないかもしれない。しかし、時制／アスペクトと文法格助辞を基準にした形式上の分類が意味上の分類と密接な関係にあるという事を示す事は出来たと思う。形式

上の特徴が分かれば意味上の特徴が分かり、逆に意味上の特徴が分かれば形式上の特徴が分かることになる。

(21)に提示した分類は明らかにこれまで一般になされている分類とは異なる。「る／－u／た／だ」とは区別される「い／かった」が時制／アスペクトを表すという機能上の類似点から、通常は別な品詞（動詞、形容詞）に分けられているものもここでは同類となっている。いわゆる形容動詞の扱いは異なるものの、形容詞を動詞の下位類とした松下文法と同じである。これは、意味分類の観点からも望ましい分類法である。例えば「ある」「ない」はどちらも概念上は反対になるが、意義の上から言うと状態を表し同類である。同様に「痛む」も「痛い」も感覚を表し、「望む」も「欲しい」も同じ感情を表す。ここではこれらが形式上も同類となる。

又、上記の分類には名詞と動詞の区別は存在しない。一般には名詞とされる「無二、拔群、既婚」などの形式上の特徴は、ここでは（一時制／アスペクト：－文法格助辞）であり、「結婚、学生」の特徴は（一時制／アスペクト：＋文法格助辞）であり、「赤、青、丸、恐れ、諦め」の特徴は（＋時制／アスペクト：＋文法格助辞）である。又、通常動詞と呼ばれる「食べ（－る）、見（－る）、歌（－う）」の形式的特徴は（＋時制／アスペクト：－文法格助辞）であり、時制／アスペクトが付いた状態では通常動詞とされる「甘え（る）、慰め（る）、恐れ（る）、諦め（る）」などの語基の特徴は（＋時制／アスペクト：＋文法格助辞）である。つまり、通常、名詞と呼ばれる語基は以下にまとめたように三つの形式的特徴を有し、動詞と呼ばれる語基は二つの形式的特徴を持つ。

(22) a. 名詞

（一時制／アスペクト：－文法格助辞）

（一時制／アスペクト：＋文法格助辞）

（＋時制／アスペクト：＋文法格助辞）

b. 動詞

(+時制／アスペクト：+文法格助辞)

(+時制／アスペクト：-文法格助辞)

これらの形式的基準に基づき名詞と動詞を完全に区分する事は不可能である。

5. 結び

本稿は、品詞の分類基準を統語上の機能と関連付ける事は妥当ではないという考えに立ち、これまでとは全く違った観点から分類を行った。語基の持つ時制／アスペクト及び文法格助辞との結合関係を基準にした形式上の分類は、従来のものより詳細な意味上の分類と密接な関係にある。更に、言語の普遍性とも言われる名詞と動詞の区分もなく、先行研究と大きく異なる。しかし日本語の語彙の特徴に促して虚心に分類したものであり、日本語の文法において説明されなければならない現象である。

日本語の品詞分類に関してはこれまで多くの学者が述べているように、分類基準が全てのメンバーに適用されるとは限らず往々にして判定者の主観に委ねられるという問題を抱えていた。学者の合意がほぼ得られているという統語論との関係における品詞分類に問題の根元があるのではないだろうか。本稿が扱った語彙は、実質概念的な意味を有する語彙に限られており、また意味上の要約に関して未解決の部分が多々残っている。しかし他との併用のない結合形態素との結合能力のみに基づく本稿の分類が、品詞分類の問題解決への一つの手がかりとなることを願う。

注

- * 1. 橋本進吉著作集・『国語法研究』1948、『現代新国語辞典』金田一春彦1997、『日本文法体系論』森岡健二1994、他参照
- * 2. 松下大三郎1930、橋本進吉1948、金田一晴彦1994、森岡健二1994、寺村秀夫1982、他参照
- * 3. アメリカ、カリフォルニア州南部のインディアンによって話されるユートアステック語族 (Uto-Aztecan) の言語
- * 4. いわゆる動詞の時制／アスペクトを表す形態素は「食べる」(tabe-ru) の (-ru) のようにかな表記の可能な音節になっている場合はかなで、「書く」(kak-u) の (-u) のようにかな表記できない音素の場合はローマ字表記した。以下、他の形態素に関しても同様。

参考文献

- Ajdukiewicz, Kazimierz (1967) "Syntactic Connexion" in Storrs McCall ed. Polish Logic 1920-1939, Clarendon Press: Oxford.
- 金田一春彦 (1994) 『現代新国語辞典』学研: 東京.
- Steele, Susan (1988) "Lexical Categories and the Luiseno Absolutive: Another Perspective on the Universality of Noun and Verbs" (1988) in International Journal of American Linguistics, The University of Chicago: Chicago
- Chomsky, Noam (1965) Aspects of the Theory of Syntax, MIT Press: Cambridge.
- 寺村秀夫 (1982) 日本語のシンタクスと意味——第一巻、くろしお出版: 東京.
- 橋本進吉 (1948) 橋本進吉著作集・『国語法研究』、岩波書店: 東京.
- 松下大三郎 (1930) 標準日本語口語法、勉誠社: 東京.
- 森岡健二 (1994) 日本文法体系論、明治書院: 東京.
- Yamashita, Sachiko (1988) Resolving the Problem of no in Japanese

結合形態素による日本語の品詞分類

: An Analysis of Words, Dissertation, The University of Arizona